

小幡一絵

関門海峡の汽笛に私の心は開く

まんじゆ



## 目次

長い身の上話ですみません	5
まんじゆ	25
唐人墓 <small>とうじんばか</small> と蝶	53
伝衛門 <small>でんえもん</small> の店番	63
多喜 <small>たき</small> 乃の涙	69
シロちゃん	81
関門 <small>かんもん</small> 海峡 <small>かいきょう</small> の汽笛 <small>いきふえ</small> に私の心は開く	85
後書き	102
参考文献	103





長い身の上話ですみません

私ねえ、人の話では、今年で八十八歳になるらしいんです。そんな年齢には見えないでしょ。これでもやることは毎日きちんとやっていますからね。しっかり食べて、寝て、テレビもつけっぱなしでよく見ます。そうそう、デイサービスにも週に何回か通っていてね、毎回何十万円もするスーツを着て、バッグに百万円入れて行きよります。そしたら私に感化されたのか、五万円のパンティーをつけてくる介護士さんも出てき始めましてね。皆さん頑張っているようで、なかなかよろしいと思います。

そのデイサービスで、運動もするんですけどね、体重は減りません。いまだに横に成長しております。この前、娘から「これ以上太ったら育てられない。」と言われましたが、こんな婆さん、そこらへんに転がしといても一人で育ちますよ。体が重いので、外では電柱から次の電柱まで歩くのがやっとなでね。杖は老人臭いから使いませんが、電柱には必ず寄りかかるんです。それで、私の家の付近にある電柱は、気の毒ではありますが、全部、傾いとります。

私は戦時中でも食べる物には不自由しなくて、生まれた時からずっと太めやった

のですが、人生で一度だけスタイルがよかった時期があります。二十代の中頃、結核にかかって、かなり痩せたんですよ。周りの結核患者が次々と亡くなっていくのに、私はなぜか助かりました。それも運命なのでしょう。そして、完治した時には、すらりとした長身の美女になっておりました。私、裁縫が得意だったから、素敵な服を色々と作って着て、その度写真館で写真を撮ってもらったんです。その写真の一枚をもとに、娘が私の肖像画を描いてくれたから、それを部屋に飾って毎日眺めとります。私もこういう時期があったんやなあ、てね。結核を患わなかったら、こうはならなかったでしょうから、人生、何がよいかわからんです。

丁度その頃、タイミングよく、夫とのお見合い話が来たんですね。運よく結婚できて、子供を産んだら、元のおでぶに戻りました。夫は物静かな人で、全く文句を言わなかったの、私は気が緩んで体重が増える一方だったんです。子育ても楽しんでから、余計太ったのでしよう。何しろ私、結核を患ったので両親が産後の私を心配して何もさせなかったのですよ。だから、娘のおむつを替えたことも、お風呂に入れたことも一度もありません。子守を雇ったから、その人達が毎日入れ替わり

でやってくれました。私、出産前は運動もしてなかったので、かなりの難産で、娘は仮死状態で生まれました。それでも娘はすすく丈夫に育ってくれましたから、私も救われましたよ。

こんな私でも、娘には毎日絵本を読んでもやりました。最後まで読み終えたことはありませんでしたけどね。途中まで読んだら、私の方が先に寝入ってしまうのです。娘から揺り動かされるんですが、眠くて仕方なくてね。お話の途中で、突如「はい、そしてみんな死にました。終わり。」と言って、眠ってしまった時もありました。

戦時中は、こちら辺にも焼夷弾が何度も落とされましたし、戦後も結核がはやりましたから、私は死を間近に感じていたのですね。だから、まだ生きているかもしれない人の話をする時も、「その方は、たぶん亡くなっております。」で大抵終わります。でも、まあ、私はまんざら嘘をついているわけでもないでしょうよ。人は皆、最後は死ぬんですから。

唯一私が母親として自慢できるのは、毎日娘に食事を作って食べさせたことです



かね。私は名前のついた料理を作ったことはありません。毎回、私独自の創作料理です。どんな材料を使って、どのように調理したかは覚えていないから、同じ料理をもう一度作れと言われても作れないんです。何でもかんでも好きな物を鍋やフライパンに入れて、好き勝手に調味料を振り掛けて適当に混ぜ合わせたら、素晴らしい料理ができるのです。私が作ったものは、なぜか全部、美味しいんですよ。本当ですよ。やっぱり私、天才でしょうか。ああ、でも、見栄えはよくない時がたまにありましたかね。一度娘から、「今作っているのは、犬の餌なの。それとも私の食事なの。」と聞かれたことがあります。

そうそう、娘が出産した時、私、遠方の娘の家まで手伝いに行っただけです。なぜだか忘れましたが、娘が退院してから一週間もたって、ようやく娘のところへ行けたのです。「さあ、私が来たからもう大丈夫。あんたは寝ときなさい。」と娘に言ったものの、私は赤ちゃんのおむつを替えたことも、お風呂に入れたこともないから、どうしてよいかわからなくなりましたね。だから娘に「やっぱり、お手伝いさんを雇おうか。」と言ってしまったんです。「お母さん、何しにここに来てくれた

の。」と言われたので、結局、娘に教わりながら、孫の世話をしましたよ。それで、よく考えたら、娘より私の方が沢山寝ていました。

私ね、若い頃、茶道を何年か習ったんですけど、家に来客があっても、お茶を入れたことはありません。同居していた私の両親が、以前は家で小売店をやっていたので、その店から栄養ドリンクと缶コーヒーを適当に出してきて、お客さんの前にポンと置くだけでした。お客さんの中には、うちのキッチンを勝手に使ってお茶を入れてくれる人もおりました。私はどかっと椅子に座ったままでね、お客さんが入れてくれたお茶とかコーヒーを美味しく頂くんです。まあ、私の方がお客さんになるのもいいもんでしたよ。

私、今でも週に一回、詩吟の会に行っておるのですが、一度も当番でお茶を入れたことはありません。そんなの面倒でやりたくないから、自分はお茶を入れる能力がないと宣言して、席に着いたまま動きません。その代わり、私、皆さんのために、お菓子とか飲み物とか沢山持っていきよります。詩吟のテキストはよく忘れるけれど、お菓子を持っていくのは忘れたことがないんです。